

# 第1回 職業について ～ 良質な職員と個人主義 ～

## 〈 職業倫理 〉

職業 (Occupation) は、  
事業 (Business) と、専門職務 (Profession) とに分けられています。

神職が、Profession の始まりです。

神職からやがて医師や教職に分化していきませんが、専門職として手厚く遇されていましたから、その業務に対して見返りを請求する必要もありませんでした。

その本質は現代も同様であり、本来ならば、専門職務は利潤を追求する目的で業務を行うものではなく、特殊で高度で専門的な業務遂行に対して、感謝の念をこめた心付けが支払われる性質のものなのです。

業務に当たっては、先ずその業務の倫理基準を考え、対象が何びとであろうとも、また、支払われる対価の額に左右されず、全力を傾注すべきという高い職業倫理が要求されます。

また、全ての職業は、それを通じて社会に奉仕するために存在すると考えます。

職業倫理、先ずは自分の職場で。

良質な職業人 : 顧客や従業員や下請けの人々の幸福を考えて事業を行ってこそ、初めて自分の事業を健全に経営していただけます。

裁量権を持ち実践した結果、さらに職業倫理が高められます。

## 〈 医聖会として期待すべき資質 〉

医聖会は良質な職業人を育成します。良質とは、倫理基準の高さを意味します。

職員は高いモラルを持っている人ということになります。

## 〈 職場管理について 〉

職場管理の要諦 : 職場を権限論的に見ないで、機能論的に見る。

理事長職、院長職、責任者職、検査職、介助職、経理職、その他種々の職務を機能論的に見る限り、すべて平等対等な「役割の配分」に過ぎません。

各自が自分の役割を十分に果たすことにより、初めて法人は発展するのであり、法人が発展することによって、その構成員たる職員も潤うこととなります。

したがって、「他人なくして自分なし。自分なくして他人なし。」ということを前提として、先ず職員には、このことを理解しうる良質な人を選ぶことが肝要です。

また、医聖会の倫理の視点からすれば、労働契約においても、労働と金銭（賃金）との交換と同時に、満足と感謝という目に見えないものの交換が無ければなりません。

次に、職員の自治意識を高めて、職場管理権を認めます。

管理部と職員との間に心が通じ合っているか否か、ということが最も肝要です。

そしてこれは、常日頃の職員との人間関係によって決まることです。

最後に、その人間関係の問題があります。

法律論では、労働の量は規制することが出来るとしても、労働の質まで規制することは出来ません。

しかし一般職員だからといって、労働の質を度外視することは出来ません。

職場管理は全ての質に関する思考であり、量に関する問題ではありません。

職員に対して、絶えず貸し方になっている法人でなければなりません。

職員管理の要諦は、感謝し、慰労し、激励することに尽きます。

医聖会のアイデンティティの確立は、正にこの奉仕の心を職業社会で実践することです。

当然のことながら、それには一人ひとりの個人の心に奉仕の理想がいつも必要です。

### 【 医聖会道德律 ISEIKAI Code of Ethics 】

私達の職業基準は、人間共同社会に対する思いやりの気持ちを表明するものである。

私達の医療、私達の欲望、私達をめぐる諸関係は、社会の一員としての最高の義務を常に考慮に入れる心構えを持って行われるべきである。

職業生活上いかなる立場に於いても、また、私達が当面するいかなる責任の場にあっても、私達の主たる思考はその責任の完遂であり、その義務の履行であらねばならない。

しかも、この責任・義務の完了したときには、人類の理想と成果の水準が、当初に比して多少でも高揚されたといえるようになされるべきである。

### ●○ ある職員との対話 ○●

職員： 医聖会を通じて追求している文面（『職場管理について』）を拝読致しました。

それは管理部と職員の距離を無くす為に必要であると。結局、『相手（人間）が好きだ』と言うのが全ての元だと思います。

先生の言葉で表すならば『愛』が根底であると思います。その愛を捉えられない限りにおいて不信感を除去することは不可能であり不信感を除去する為の原則の扱いを誤れば職員の不信感は増す一方だと思います。

よって、かなりのリスクと効果が兼ね備わっているものだと感じました。

昨日のお話で『良質な職員』という表現がございました。私が良質かどうかは別として、私は医聖会に属されている方全てが良質だと思います。一緒に仕事しているのに不必要な人間は居ないと思います。それを仕事の出来・不出来や自分の望む行動をするかしないか等でしか判断出来ないのは哀しすぎます。

私は生きていく上で失敗はあっても間違いは無いと思っています。

ミスイクも含めそれが私の人生であると言えるからです。

理事長： やはりあなたはいいセンスしていますよ。でも、もう少し知性を働かせて考えて見ましょう。

「それを仕事の出来・不出来や自分の望む行動をするかしないか等でしか判断出来ないのは哀しすぎます。」との段ですが、私は、人間を能力で判断することは必要だと思います。

人間に与えられた能力といますものは皆違います。違って当然だし、違うから成長もある。芸術が得意な人もいれば数学が得意な人もいる。偏差値の高い人もいれば低い人もいる。手の器用な人がいればそうでない人もいる。愛に生きる人もいれば愛とエロスの区別のつかない人もいる。医者に適する能力の人もいればそうでない人もいる。

すべてのものに民主主義的な考えで臨むことは、これすなわち人間をその人格で判断していないという正にそのこととなります。

つまり人間は愛を共有しあう関係においてのみ平等であるということをお解りになっていないように思います。

あなたの言われることは、そうだその通りだと世間では通るでしょう。

私たちは血も涙もない合理主義の集団に映り、あなたに同情が行くでしょう。

しかしながら大きな逆説に気づいていないことに目を向けてほしいのです。

人を能力で差別することは必要です。それとその人の人格に対する評価とを混同して捕らえていることが大きな過ちを犯すのです。

能力で差別しても相手に対する尊敬や愛は何ら変わることがないのです。

能力の多寡は、愛を共有しあう関係に際しては何も関係のないことなのです。

ここで言う『良質な職員』とは、能力の良質を言っております。

まずは私たちが考える医聖会の理念を感覚ではなく知性で理解でき共感できる能力、そして行動できる能力を言っております。

また自己の価値観との整合を図れる能力も共に歩むためには必要です。

話は変わりますが学業能力別偏差値で学校やクラスを分けるのが正しいのは、能力で個人の人格や人間性を決め付けないという確固とした個人主義の思想に裏打ちされているからに他なりません。他者を自分と同じくらい大事にするというこの個人主義の思想があなたにあれば、目の前の現象をもっと深い愛でとらまえて行けると思います。

## ◆◇ 資料 ◇◆ イブン・ハルドゥーン『歴史序説（I）』岩波文庫より

### 第一章 人類の文明について その一般論と諸前提

#### 第一前提 社会的結合は人間にとって絶対必要である

哲学者は、このことを「人間は本性上社会的存在である（1）」という言葉で説明した。言いかえれば、人間は社会的結合なしには過ごせないということである。そして社会的結合とは、彼らの術語でいえば都市であり、文明という言葉も同じ概念を持つものである。そのわけは次のように説明できる。神は人間を食物なしでは自分の生命を維持できないような形で創造された。すなわち、神は人間に対し、本能によって、また食物を獲得するために与えられた力でもって、それを捜し求めるように導かれた。

しかし、人間一個人の力だけでは、必要とする食物を手に入れることは不可能であり、自分の生命を保つだけの食物すら準備できない。最小限の食物、たとえば一日分の食糧としての小麦を取ってみても、粉に挽いたり、捏ねたり、パンに焼いたりするなど、多くの操作を必要とする。またこれら三つの仕事にもそれぞれの道具が必要であり、その道具もまた鍛冶屋や大工や陶工など多くの技術があってこそ得られるものである。仮りに、何の加工もされていない生の穀物を食糧とする場合を考えてみても、その生の穀物を手に入れるには、種蒔きとか刈入れとか、

脱穀のための打穂など、種々の作業を経なければならない。そしてこれら一つひとつの作業にも、また多くの器具や技術が必要であって、おそらく前述のような小麦をパンに焼く場合よりもはるかに多数の器具や技術を要するであろう。

このようにして単に一個人の力では、これら全部はいうまでもなく、その一部をも果たしえない。そこで、お互いに食物を獲得するためには、多数の人間の力を結集しなければならない。このような相互扶助によってこそ、人間の生存に必要な力、それも相互扶助に携わった人々よりも数倍も多くの人々の需要を満たす力が得られるのである。また、同様に、人間一人ひとりが自分を敵から守るためにも、人間相互の助けあいが必要となる。それは神が、あらゆる動物についてそれぞれの特質を造られ、彼らに力を分かち与え給うたとき、野獣には人間より完全な力を多量に与えられたからである。たとえば、馬の力は人間よりも強く、驢馬や牡牛の力も馬の場合と同様で、獅子や象に至ってはさらに何倍も強力である。

動物は本能的に他のものと闘う性質を持っているので、神は動物それぞれに、敵の攻撃を防ぐためにふさわしい肢体を与えられた。ところが、人間には動物の肢体の代わりに、思考力と手を与えられたのである。手は思考力の助けで技術を用意し、技術は人間に道具をもたらした。この道具こそ、人間以外の動物に備わった護身武器としての肢体に代わるものである。たとえば、突き刺すための角に代わる槍、引っ搔いて傷つける爪に代わる剣、固い外皮の代用となる楯など、その他ガレノス（2）が、彼の肢体の効用に関する書のなかで述べているとおりである。

人間一人の力では、野獣とくに肉食獣一匹の力にも到底対抗することはできない。人間は概して一人だけでは自分を守ることすら不可能である。それに防禦用の道具を用いるにしても、人間一人の力では不十分である。それは、そうした道具はあまりにも多く、またそれを生み出すには多くの技術や器具を要するからである。そこでこれらすべての事柄には、人間同士の相互扶助がどうしても必要である。この相互扶助がなくては、食物や糧すら手に入れることもできず、したがって生命をまっとうすることも不可能である。神は人間をその日の糧なしには生きることができないように創造されたからである。また人間は、武器なくしては自分を敵から守ることができず、結局動物の餌食となって死を早め、人類は滅亡する。相互扶助あってこそ、糧となる食物も、自己防禦の武器も得ることができるのである。神は賢明にも、人類の存続と保存をまっとうし給う。

要するに、この社会的結合は人類にとって不可欠なものであり、これがなくては人類自身の存在も、人類を世界に住まわせた地上における神の代理者にさせようとする神の意志も、ともに果たされなくなるのである。このことこそ、この学問の対象として、われわれが設定した文明の意味である。

註（1） アリストテレスの「人間は本性上ポリスの動物である」という言葉に由来している。

（2） ギリシャの医学者で哲学者。とくに解剖学と病理学に精通し、人体の構造を明らかにした。